



南山大学人類学博物館 MUSEUM NOTES

- ・資料報告：林魁一コレクション
—コレクションの概要と特徴について—
- ・友枝コレクションの写真資料

VOL.7 2022.6

資料報告

林魁一コレクション

—コレクションの概要と

特徴について—

はじめに

二〇二二年二月に発行された、『人類学博物館紀要』第四〇号で、人類学博物館に所蔵されている林魁一（はやし かいいち）コレクションの土器資料に関する整理報告を行いました。資料整理の成果と、紀要での発表に至るまでの経過、作業の中で筆者が考えたことについて、簡単な報告します。コレクションの資料の詳細に関しては、『人類学博物館紀要』第四〇号をご覧ください。

一．林魁一コレクションについて

今回報告したコレクションは、明治から昭和にかけて岐阜を中心に活動した考古

学者、林魁一氏（以下、林氏）から寄贈を受けたものです。

林氏は、一八七五年岐阜県太田町（現在の美濃太田市）の林家に生まれました。日本人類学の祖とも言われる坪井正五郎の指導を受けながら研究を行い、岐阜県美濃地方や飛騨地方の調査を中心に調査を行い、論文を発表しています。一九六一年に亡くなるまで多くの研究者が指導を仰いだ人物でした。

人類学博物館へ林氏のコレクションが寄贈されたのは、一九五〇（昭和二五）年のようです。南山大学と、人類学博物館の母体である人類学民族学研究所が開かれたのが一九四九年のことです。人類学博物館の歴史の中でもかなり早い段階で収蔵された資料と言えるでしょう。

「コレクションは土器や石器をはじめとした考古学的資

料からなります。資料はどのように集められたものがあるか詳しい記録が残っていませんが、発掘調査によって収集されたものや、現在遺跡として発掘された場所の近くで、遺跡が発掘されるよりも前に拾い集められたものなど、様々な経緯で収集されたようです。

二．コレクションの特徴

さて、コレクションについてももう少し詳しく見ていきます。「コレクションには、土器が百五十八点、石器が二百八十七点、貝殻、骨が四十三点、金属器、玉製品が十三点あります。コレクションの資料は黒色で紙製の箱に入られており、それぞれの箱に収集された場所が書かれています（図一）。

「コレクションのほとんどは岐阜県内で収集されたもので、一部愛知県内の遺跡や、

朝鮮半島で収集されたものもあります。石器は愛知県内で収集された一点を除いて全て岐阜県内で収集されたものです。それ以外は、岐阜県内外で集められたものが混在しています。

土器は、縄文土器、弥生土器、須恵器などがあり、縄文土器が主体となっています(図一、二)。縄文土器は中期ごろの資料が多く、様々な地域の特徴を示しています。もちろん、岐阜県内で顕著に見られる土器の特徴を持つものもあります。

石器資料は矢の先端に装着する石鏃(せきぞく)や、



図一：コレクションが入れられている箱。上面には収集地が書かれています。



図二：コレクションの土器資料



図三：コレクションの土器資料。上段左側の3つは林氏の発表した論文に掲載された資料です。



図四：コレクションの石器資料



図五：コレクションの石器資料

搔器(そうき)、石斧、重りとして用いられたとされる石錘(せきすい)が中心となっています(図四、五)。資料の数は、石鏃、搔器などの小型の石器が最も多く、次いで石斧、石錘という構成です。石斧は、表面を石などで叩いて打ち欠いて作った打製石斧と、表面を磨いた磨製石斧の両方があります。小型の石器は、岐阜県で特徴的な下呂石、チャートなどが主な材料となっており、岐阜県の特徴をよく示しています。

骨は鹿の角で、こちらは加工された跡がみられます。金属器について詳しい観察はまだできていませんが、耳飾りと見られる資料が複数あります。玉類には勾玉(まがたま)、管玉(くだたま)があります。

これまで、人類学博物館に収められているコレクションの特徴について書きました。実は、岐阜県美濃加茂市にある、美濃加茂市民ミュージアムにも林氏のコレクションが収められています。人類学博物館の林魁一コレクションの特徴は、こうした

他の林氏のコレクションと比較することによって、より一層明らかになっていくでしょう。

おわりに

今回の土器資料の整理は、南山大学大学院人間文化研究科人類学専攻に所属する学生が主体となって行われました。資料の整理作業にあたり、博物館のスタッフの方々をはじめ、非常にたくさんのご助言とご協力をいただきました。末筆ではありますが、改めて御礼申し上げます。また、今後より多くの資料が様々な形で活用

されていくことを願っています。

(南山大学大学院人間文化研究科
人類学専攻博士前期課程修了生

湯屋秀捷)

参考文献

齊藤忠

一九八四「林魁」『日本考古
学史辞典』四六八・四六九、東京
堂出版。

藤村俊・杉浦綾子

二〇〇五「寄贈された“林魁”
コレクション」資料の来歴が
判明する資料を中心として」
『美濃加茂市民ミュージアム紀
要』第四集：二―十四、美濃加茂
市民ミュージアム。

湯屋秀捷・岡智康・秦優莉香

二〇二二「南山大学人類学博
物館の林魁」コレクション(1)
―土器―『南山大学人類学博
物館紀要』第四〇号：一一―二七、
南山大学人類学博物館。

友枝コレクションの

写真資料

南山大学人類学博物館で
は故友枝啓泰(ともえだ ひ
ろやす)氏による民族学画
像コレクション(以下友枝コ
レクション)を収蔵していま
す。友枝氏はアンデス地域
を中心に四十年以上にわた
ってフィールドワークを行い、
文化人類学の研究者として
活躍されました。

二〇〇五年三月、アンデ



写真一 楽隊の行進

(ペルー アヤクチヨ県ソコス 1965年)

ス諸民族の儀礼や生活習慣、
風景を撮影した35mmマウ
ントスライド約四万枚、35

mmネガフィルム約三千枚、
6cm×6cmブローニーフィ
ルム約二千枚が当館に寄贈
されました。以来、現在に至
るまで分類や整理、調査が
続けられてきました(当館
紀要二四、二五号)。

友枝コレクションは単に
膨大な量があるというので
はなく、調査の補助資料と
して撮影されたもの
が多く、民族誌的価
値が非常に高い貴
重な資料群です。同

じ場所で、年代を越えて何
度も撮影している場合もあ
り、時間経過を見る歴史資
料としても重要な意味を持
ちます。

分類、整理を主導した河
邊真次氏によると、友枝コ
レクションはおおまかに四
つの年代、内容に分けられ
ます(紀要二五号参照)。

①一九六〇年代 中央ア
ンデスにおける発掘調査、
ペルー南部高地アヤクチヨ
における社会人類学的調査
②一九七〇年代前半 中
央アンデス高地、上流アマゾ



写真二 ピーロ族の土器作り

(ペルー ウカヤリ県セパヤカ 1973年)

ンにおける民族学的調査

③一九七〇年代後半、一九八〇年代 中央アンデス高地(ペルー南部、ボリビア)における農牧民社会の民族学的調査

④一九九〇年代 ペルーの国民文化形成に関する民族学的研究

コレクションは年代別に分けられていましたが、撮影場所や年代などの基本情報



写真三 リャマの群れ
(ペルー クスコ県シウサ 1985年)

報が不足しているものも数多く含まれています。また、資料の退色、劣化が進んでいるため、これからの活用を考えてデジタル化作業が行われました。一部の画像は当館のホームページで公開しているほか、現在博物館入口でカラー印刷した写真の一部を展示しています(写真五)。

(南山大学人類学博物館)

学芸員 秦 優莉香



写真四 エル・ブルホ遺跡景観
(ペルー ラ・リベルタ県トルヒーヨ 1997年)

参考文献

加藤隆浩・河邊真次

「友枝啓泰アンデス民族学画像コレクション」『南山大学人類学博物館紀要』第二四号：三一―五五、南山大学人類学博物館。友枝啓泰

友枝啓泰

「アンデス世界の記録者として

―民族写真の可能性―」

『南山大学人類学博物館紀要』

第二五号：九二―七、南山大学人類学博物館。

類学博物館。



写真五：博物館入口

河邊真次

「友枝啓泰アンデス民族学画像コレクション」データベース化の意義と学術的利用の可能性―アンデス民族芸術「サルワの板絵」のモチーフとの比較研究をてがかりとして―『南山大学人類学博物館紀要』第二五号：二九―五三、南山大学人類学博物館。

南山大学人類学博物館

museum notes VOL.7

二〇二二年六月発行

編集・発行／南山大学人類学博物館